

能登里山

山野草



ササユリ

能登町立上町公民館

「能登里山・山野草」発行にあたって

この冊子は、令和元年度能登町特色ある公民館活動事業として取り組み、作成したものです。作成のきっかけは旧柳田村学校教育研究会理科部会が撮影した村内の山野草アルバムが上町小学校の廃校・整理の際に見つかりました。このアルバムには、「花が目立ってきれいだけれど正確にその名が知られていないもの、柳田村（当時）では稀有なもの」などが収められています。写真の撮影場所は柳田村全域にわたっており、相当の熱意をもって取り組まれたことが伺えます。写真が撮影された時期は昭和60年（1985年）で、30余年が経過していることから、写真の劣化が進んでいるため、資料として残す必要性を感じました。自生している高等植物は800種あるといわれますが、本誌の掲載は113種と8分の1にすぎませんが、地域の植生についての理解を促すという趣旨に重点を置き編集しました。現在、幸いにも掲載された全植物が生息していると推定しています。アルバムには、子供たちに1種類でも多く、正確な名前を覚えて自然への関心を高めてほしいとの理科部会メンバーの願いが込められていることは疑いありません。また、これが子供たちだけでなく大人の方々にも種の多様性の維持に目を向けていただく機会になれば幸いです。当時の理科部会のメンバーを以下にご紹介します。

理科部長 表口 里信氏

理科部員 武藤 清一氏 谷口 正成氏 坂井 典一氏 幸正 久志氏 浦 信一氏

なお、本誌制作において、竹内 剛氏(上町)、当時部員の浦 信一氏(上町)、田中 和人氏(金沢市)にご協力を頂き感謝申し上げます。

掲載植物一覧 (保護のため詳しい撮影場所は記載しません。)

ミツバチグリ	マルバマンサク	キブシ	シュンラン	チゴユリ	イチリンソウ	ミヤマカタバミ
ショウジョバカマ	クサイチゴ	タチツボスミレ	スミレ	ツボスミレ	トキワイカリソウ	スミレサイシン
オオイワカガミ	トキノソウ	エビネ	クマガイソウ	ササバギンラン	キンラン	ヒトリシズカ
フタリシズカ	ホウチャクソウ	ヒメアオキ	タムシバ	ウワミズザクラ	レンゲツツジ	サイコクミツバツツジ
ミツバアケビ	ウラジロウラク	ヤマツツジ	サワオグルマ	トウバナ	ジシバリ	ササユリ
ウワバミソウ	マタタビ	キンキマメザクラ	ヒゲノカズラ	ヤマシャクヤク	モウセンゴケ	スイカズラ
キンコウカ	アカシヨウマ	キクバドコロ	ケナシヤブデマリ	タニウツギ	フジ	ジャケツイバラ
オオバギボウシ	コイケマ	コシジタピラコ	ノハナシヨウブ	ヒヨドリバナ	ヤマホタルブクロ	ヤマボウシ
ウリノキ	ノイバラ	ヤマアジサイ	ママコナ	オトギリソウ	ウツボグサ	タケニグサ
イワガラミ	ムラサキシキブ	アカメガシワ	ネムノキ	リョウブ	クサギ	ヤブラン
クマヤナギ	イタドリ	ヤブガラシ	トモエソウ	ヤマゴボウ	ネジバナ	オニスグ
キカラスウリ	ミズオトギリ	イチヤクソウ	ボタンヅル	ヘクソカズラ	ノササゲ	ウバユリ
オニドコロ	オオイヌタデ	ニガクサ	ノカンゾウ	ツチアケビ	ヤブカンゾウ	エゾリンドウ
イボクサ	ヒガンバナ	カワミドリ	キツネノカミソリ	ツリフネソウ	ベニバナボロギク	ユウガギク
イヌガンソク	ダイモンジソウ	クサソテツ	コウヤワラビ	ヤマヤブソテツ	ヤマソテツ	イワガネゼンマイ
クジャクシダ	キョウタケシダ	トラノオシダ	ベニシダ	ミソシダ	シシガシラ	ジュウモンジシダ
ヒメシダ						



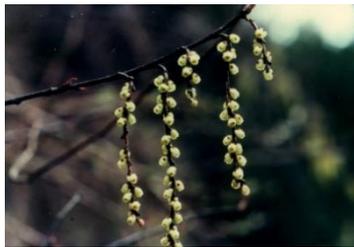
ミツバツチグリ

バラ科キジムシロ属の多年草。茎の高さは15～30cmになる。葉は3枚の小葉からなり、小葉の形は長楕円形～卵形で縁には鋸歯があり、葉柄の基部には托葉がつく。花期は4～5月で、花茎に黄色で径10～15mmの花を10数個つける。



マルバマンサク

マンサクの仲間は花が咲いている時期には葉がなく、葉を観察できる時期には花がない。北海道から日本海側、鳥取県まで分布する落葉低木で、多雪地帯に適応している。葉全体が丸いというより、先端が円頭であるという意味。



キブシ

本州の日本海側、北海道に分布。林縁や谷、川岸などにふつうに生える。高さ3～5mの落葉低木。葉は互生、葉身は長さ5.5～12cmの長楕円形～卵形で先は尖る。3～4月、葉の展開前に総状花序を出し、淡黄色の花を密につける。キブシの変種で、葉裏の葉脈に毛があるタイプをケキブシと呼ぶ。



シュンラン

ラン科シュンラン属の蘭で、土壤中に根を広げる地生蘭の代表的なものである。名称の由来は「春蘭」で、春に咲くことから。花は3～4月に咲く。前年の偽球茎の根元から出て、葉の陰に茎をのぼし、その先端に花が1個つくが、まれに2～3個つくこともある。



(ウィキペディア)

生食、茹でて酢の物に利用。



チゴユリ
 イヌサフラン科チゴユリ属の多年草。日本各地の平地から山地の落葉広葉樹林に生える。草丈 10～30cm、花は白色。



(写真 AC/unic)

キクザキイチリンソウ
 キンポウゲ科イチリンソウ属の多年草。本州から九州の野山、木陰の草むら、林地に生える代表的な「春植物」。根茎は横に這い、匍匐枝を出す。花茎の高さ 10cm 程度、径 4 cm ほどの花を 1 個つける。花の色は白～薄紫と変化がある。



ミヤマカタバミ
 カタバミ科カタバミ属の多年草。別名は、ヤマカタバミ、エイザンカタバミ。山地の林の下に生える。太い根茎をもつが分岐しない。柄の長い 3 つの小葉をもつ葉を根生する。小葉の先端は切形になり、中央がへこむ。葉柄や葉の裏面、花茎や萼、苞には細かい軟毛が密に生える。3～4 月頃に白い 5 枚の花弁の花を咲かせる。



ショウジョウバカマ
 メランチウム科ショウジョウバカマ属の多年草。やや湿った場所に生える。垂直分布が広く、人里近くの田んぼの畦道から高山帯の高層湿原まで。葉は広い線形になめらか、根本から多数出てロゼット状に平らに広がる。花茎の先端に横向きに花が付く。花の色は生育場所によって、淡紅色、紫色、白色と変化に富んでいる。



クサイチゴ

バラ科キイチゴ属の落葉小低木である。別名、ワセイチゴ（早稲苺）。クサイチゴは背丈が 20～60cm と低く、草本のように見えるため、このように呼ばれるが、実際は木本である。全体に短い軟毛が密生し、茎には小さい刺がある。花期は 3～4 月。花は白色で、5 弁花。果実は赤く食用となる。



タチツボスミレ

スミレ科スミレ属の多年草。日本で、ごく身近に見られるスミレ類の一つ。丸い葉と立ち上がる茎が特徴。花期は 3～5 月。花茎は葉の間から出て立ち上がり、先端がうつむいて花を付ける。花は典型的なスミレの花の形だが、スミレより丸っこく、花色は薄い紫が普通。花期が終わると、葉の間から茎が伸び始める。年は越さず、春には地下茎から出発する。



(ウィキペディア)



スミレ

スミレ科スミレ属の多年草。平地に普通で、山間部の道ばたから都会まで、都会ではコンクリートのひび割れ等からも顔を出す。花は 4～5 月、濃い紫色。スミレ科スミレ属の植物の総称でもある。



ツボスミレ

スミレ科スミレ属の植物。ニヨイスミレとも呼ばれる。全体に小柄で、茎はよく伸びて往々にして地表を這い、花は匍匐する茎の葉腋から出て、花色は白で、上弁は反り返る。葉は丸っこく、基部は深く心形になるので、全体としてはきれいなハート形の葉である。葉は柔らかく、緑色でつやがなく、無毛。葉の縁には粗くて背の低い鋸歯がある。



トキワイカリソウ

メギ科イカリソウ属の多年草。花は4～5月で白色。葉は冬も枯れずに春まで残る。名は花の形から錨を連想したものとされる。林下に普通に見られる。日本海側に分布し、雪どけすぐに光合成を始められる越冬葉は、豪雪地帯では都合がいい。



スミレサイシン

多年草、スミレ科スミレ属の多年草。日本海側のあまり高くない山地が主体で、半日陰の落葉樹林下などを好む。草丈は5～15cm。葉は先がつまんだようにとがった心形で長さ5～8cm。両面とも緑色で、やや厚く、ほとんど無毛。花期には基部がよく展開していないことが多い。花のあとの葉は大型。



(ウィキペディア)



オオイワカガミ

イワウメ科イワウチワ属の多年草。山地の林床や岩場に生育する常緑の多年草。

茎は短く地表をはい、先に数個の葉を束生する。葉は長い柄があり、革質、円形で3角状の鋸歯が多数あり、長さ幅ともに8～12cm、表面に光沢がある。和名はそれを鏡に見たてたもの。

花茎は束生する葉の中央から伸び、先に数個の花からなる総状花序をつける。



(ウィキペディア)



トキシソウ

ラン科トキシソウ属の多年草。湿地に生える。花期は5～7月、茎頂に紅紫色の花を1個つける。和名は花の色がトキの翼の色であるトキ色に似ていることに由来する。花は横を向き、大きく開かない。

希少



希少

エビネ

ラン科エビネ属の多年草。地上性のランである。ジエビネ、ヤブエビネと呼ばれることもある。花は春咲きで、新芽の展葉とともに高さ 30～40cm の花茎を伸長させる。秋には翌年の新芽を生じ、冬までに少し生長してから越冬する。



希少

クマガイソウ

ラン科アツモリソウ属に分類される多年草。大きな花をつけ、扇型の特徴的な葉をつける。和名の由来は、アツモリソウともに、膨らんだ形の唇弁を昔の武士が背中に背負った母衣に見立て、源平合戦の熊谷直実(くまがい なおざね)と、一ノ谷の戦いで彼に討たれた平敦盛(たいらの あつもり) にあてたものである。



希少

ササバギンラン

ラン科キンラン属の多年草。花期は 5～6 月で、白色の花を穂状花序に数個つける。花は開かない。



希少

キンラン

ラン科キンラン属の多年草。和名の「金蘭」は黄色(黄金色)の花をつけることに由来する。山や丘陵の林の中に生える地上性のランで、高さ 30～70cm の茎の先端に 4月～6月にかけて直径 1cm 程度の明るく鮮やかな黄色の花を穂状につける。花は全開せず、半開き状態のままである。



ヒトリシズカ

センリョウ科チャラン属の多年草。山地の林内、林縁に自生、群生する。草丈 10~30cm、葉は4枚が輪生状に付き、光沢があり、縁に鋸歯がある。花期4~5月、茎の先に1本の穂状花序を出し、ブラシ状の小さな白い花を付ける。



フタリシズカ

センリョウ科センリョウ属の多年草。山林の比較的暗い場所に分布する。花期は4~6月。茎の先に数本(2本が多い)の穂状花序を出し、小さな白い花をつける。葉は2対4枚がややずれてつく。和名は、2本の花序を、能楽「二人静」の静御前とその亡霊の舞姿にたとえたもの。ヒトリシズカと対を成す。



ハウチャクソウ

ユリ科チゴユリ属の多年草。日本全国に分布する。雑木林などの樹間のひらけた場所に群生する。初夏に地味だが白から緑へのグラデーションが美しい花をつける。茎は上部で枝分かれする。



ヒメアオキ

ガリア科アオキ属の常緑低木。暖温帯林下に自生するアオキの日本海側多雪地帯型の変種で、アオキよりひとまわり小さい。幹は直立せず積雪にまかせるように横這いし、葉がつく部分で斜めに立ち上がる。葉の形は長楕円形で、葉の縁には粗い鋸歯がある。花期は3~5月。果実は秋頃から赤く熟し、翌年の開花の頃までつく。



(ウィキペディア)



タムシバ

モクレン科モクレン属の落葉小高木。別名を「ニオイコブシ」といい、花には芳香がある。早春に白い6弁花を葉に先立って咲かせる。他に「カムシバ」の別名をもつ。こちらは「噛む柴」で、葉を噛むとキシリトールのような甘味があるためにこの名前がついた。花はコブシに似るが、コブシが花の下に葉が一枚ついているのに対し、タムシバは花の下に葉がない。



(ウィキペディア)



ウワミズザクラ

バラ科ウワミズザクラ属の落葉高木。和名は、古代の亀ト（亀甲占い）で溝を彫った板（波波迦）に使われた事に由来する。山野に自生し、日照と小川沿いなど湿潤した環境を好む。樹高は約10～15m。樹皮は灰～褐色。小枝の多くは落葉後に落ちる。



サイコクミツバツツジ

関東、近畿地方及び九州の低山に見られるツツジの一種。数多いツツジの仲間のうち最も早く開花し、早春の山を彩る。地域差による品種や変種が非常に多く、正確に分類するのは困難とされるが、基本種のミツバツツジは雄しべが5本、それ以外の多くは10本であるため比較的に見分けやすい。葉の付け根付近に毛があること、10本の雄しべには長短があることが特徴。



レンゲツツジ

ツツジ科ツツジ属の落葉低木で有毒植物。花は5月、やや大きく、橙色。つぼみの様子が蓮華に見えることから名付けられたという。「ウマツツジ」、「ベコツツジ」などの別名もある。



ミツバアケビ

アケビ科アケビ属の落葉性つる性木本。3枚の小葉があることからミツバアケビとよばれる。つるの繁殖力が強く、茎が他の樹木にからんで這い上がる。果実は熟すると裂け、中の果肉は甘くて食べられる。茎は太いもので直径2cmになる。



ウラジロヨウラク

ツツジ科ヨウラクツツジ属の落葉低木。高さは1~2m。葉の裏が緑白色をしている。

花期は5~7月。花は白っぽい淡紅色で壺型をしており下垂してつき、長さ11~14mm。先端が浅く5裂し外側へ反っている。

和名「裏白瓔珞」の由来は、花の様子が仏像が身につけている装身具(瓔珞・ようらく)に似ていること、葉の裏が白いことから付けられた。



ヤマツツジ

ツツジ科ツツジ属の半落葉低木。高さは1~5mになり、若い枝には淡褐色の伏した剛毛が密生する。林下に普通に見られる。花は赤色。葉は互生し、葉柄は長さ1~3mmになる。春葉と夏葉の別があり、春葉は春に出て秋に落葉し、夏葉は夏から秋に出て一部は越冬する。



サワオグルマ

キク科キオン属の多年草。日当たりのいい山野の湿原、水辺、耕作放棄水田、水田脇などに自生する。

径3cm~4cm程の黄色の花を数個から30個程度つける。花期は4月から6月頃。



トウバナ

シソ科トウバナ属の小形多年草。畑や路傍に生える。四角く、立ち上がる花序に輪生状に多数の段に花をつける。茎は細くて基部で分枝して束になり、下の方は横に這って広がり、先端では立ち上がって高さ 10～30cm になる。花期は 5～8 月。花序は茎の先端、及び葉腋から出て立ち上がる。



ジシバリ

キク科ニガナ属の多年草。花は黄色。茎は地を這う。「ジシバリ」は、地面を這うように伸びて広がる様子が、地面を縛っているようにみえることに由来する。岩の上にも生えることができるニガナという意味である。別名、イワニガナ（岩苦菜）



ササユリ

ユリ科ユリ属の球根植物。日本特産で日本を代表するユリである。5月～7月頃に淡いピンク色の花を咲かせる。花粉の色は赤褐色である。葉や茎が笹に似ていることからこの名がある。

乱獲により減少傾向にある



ウワバミソウ

イラクサ科ウワバミソウ属の多年草。別名、ミズナ、ミズともよばれ、山菜としても珍重される。名称の由来は、野生場所がウワバミ（大蛇）の住みそうな所に生えている草という意味。葉の葉脈が左右非対称なことから、当地ではカタハと呼ぶ。

茹でて叩くとネバネバに
アクが無いので重宝する
酢の物、和え物、漬物に



半夏生のころ実を採取し、漬物やマタタビ酒にする。



(ウィキペディア)

マタタビ

マタタビ科マタタビ属の落葉蔓性木本である。別名夏梅ともいう。6月から7月に径2cmほどの白い花を咲かせる。一説に、「疲れた旅人がマタタビの実を食べたところ、再び旅を続けることが出来るようになった」ことから「復(また)旅」と名づけられたというが、典型的な民間語源あるいは単なる流言飛語の域を出ない。



キンキマメザクラ

バラ科の落葉小高木。本州の中部地方以西、近畿、中国地方に分布するマメザクラの変種。高さ3～5m。葉は倒卵形ないし広倒卵形、長さ4～8cmでマメザクラより大きい。花は白色か淡紅色で萼筒(がくとう)は細長く8～9mm。



ヒカゲノカズラ

ヒカゲノカズラ植物門に属する代表的な植物である。蘿(かげ)という別称もある。広義のシダ植物ではあるが、その姿はむしろ巨大なコケを思わせる。



山野に自生する多年草で、カズラという名をもつが、つる状ながらも他の植物の上に這い上ることはなく、地表をはい回って生活している。

(ウィキペディア)



ヤマシャクヤク

ポタン科ポタン属の多年草。開花時期は4～6月。花が開いているのは3～4日程度。秋に実が熟すと結実しない赤色と結実した黒色の種子ができる。和名の由来は、山地帯に生え全体がシャクヤクに似ていることによる。



希少

(ウィキペディア)



モウセンゴケ

モウセンゴケ科モウセンゴケ属の多年草。食虫植物の一種で、葉にある粘毛から粘液を分泌して虫を捕獲する。花は6～8月、白。花序は一方に傾く。湿った所に生える。



(ウィキペディア)



スイカズラ

スイカズラ科スイカズラ属の常緑つる性木本。別名、ニンドウ(忍冬)。冬場を耐え忍ぶ事からこの名がついた。花は5～7月に咲き、甘い香りがある。初め白く、後に黄変する。



キンコウカ

キンコウカ科キンコウカ属の多年草。葉は根生し、形はアヤメのような剣状線形。花期は7月～8月で、花茎の上に花被片6枚の星型の黄色い花を総状につけ、下方から開花していく

希少



(ウィキペディア)

アカショウマ

ユキノシタ科チダケサシ属の多年草。落葉広葉樹林の林縁などに生育する。地下に太い根茎があり、株を形成して生育する。花は5～6月、白。花序の枝は分枝しない。



キクバドコロ

ヤマノイモ科ヤマノイモ属の多年草。花は6月～7月。山地や丘陵地の林内や林縁部に生える蔓性の多年草で、雌雄異株。葉は5～7裂する。



ケナシヤブデマリ

スイカズラ科ガマズミ属の落葉低木。高さ2～4 m、樹皮は灰黒色、葉は対生。本州の東北地方～北陸地方の日本海側の山野の谷沿い、川沿いに多く自生する日本固有種。

花は、4～6月枝先に5～10cmの白花を散房花序につける。



タニウツギ

スイカズラ科タニウツギ属の落葉小高木で、田植えの時期に花が咲くので「田植え花」としても知られる。新緑の中で咲くピンクの花はひときわ映えて見えるので見つけやすい。花期は5～6月。今年枝の先端が葉腋に散房花序をつけ、花冠の内側より外側の色が濃く、開花しているものより蕾のほうが濃い。



(ウィキペディア)



フジ

マメ科フジ属のつる性落葉木本。

一般名称としての藤には、つるが右巻き（上から見て時計回り）と左巻きの二種類がある。右巻きの藤の標準和名は「フジ」または「ノダフジ」、左巻きの藤の標準和名は「ヤマフジ」または「ノフジ」である(牧野富太郎の命名による)。



ジャケツイバラ

マメ科ジャケツイバラ属のつる性の落葉低木の植物。高さ1~2mになるつる植物で、茎と葉軸の裏面に鋭く丈夫な逆刺をもつ。若い茎には柔らかい毛を生じるが、後に無毛となり、棘は次第に強く発達する。



オオバギボウシ

キジカクシ科ギボウシ属の多年草。別名は多く、トウギボウシ、ハヤザキオオバギボウシ、ウノハナギボウシ、ウツリギボウシ、アツバギボウシ。花は7~8月、淡紫色。花茎は葉よりはるかに高くのび、多数の花をつける。葉は根生し広く大きい。山地や崖地のやや湿った所に多く見られる。

若芽、茎は和え物、おひたしするの、煮物に。
花は酢の物、サラダとして。



コイケマ

キョウチクトウ科イケマ属のつる性多年草。茎を切ると白い乳液が出る。花期は7~8月、淡黄色。山に生え、少ない。

希少



コシジタビラコ

小形の多年草。山の水辺に生える。花序は初めに巻いている。花は下方から咲き、るり色。東北地方から中部地方にかけての日本海側に分布し、名前もこれに由来します。見た目にはちがいが分からないが、4つずつまとまってつく果実それぞれの上側を縁取るように付属体がある。



ノハナショウブ

アヤメ科アヤメ属の多年草。園芸種であるハナショウブ（花菖蒲）の原種である。花期は6月～7月で、赤紫色の花びらの基部に黄色のすじが入るのが特徴。湿地に生える。



希少

(ウィキペディア)



ヒヨドリバナ

キク科ヒヨドリバナ属の多年草。花は7～9月、白い筒状花をつける。林道の脇、草原や溪流沿いなどの日当たりの良い場所に自生する。ヒヨドリが鳴く頃に開花することから、この和名になったもよう。フジバカマに似ているが、フジバカマの葉は3裂しているが、本属は裂けないので区別できる。



(ウィキペディア)



ヤマホタルブクロ

キキョウ科ホタルブクロ属の多年草。花は6～7月で白から淡紫色と変化がある。由来は提灯を意味する火垂（ホタル）からきている説が有力。

(ウィキペディア)



白花



ヤマボウシ

ミズキ科ミズキ属の落葉高木。花は6～7月に開き、淡黄色で小さく、多数が球状に集合し、その外側に大形白色の総包片が4枚あり、花弁のように見える。果実は集合果で9月頃に赤く熟し、直径1～3cmで球形、食用になる。果肉はやわらかく黄色からオレンジ色でありマンゴーのような甘さがある。果実酒にも適する。



(ウィキペディア)



ウリノキ

ウリノキ科ウリノキ属の落葉小高木～低木。和名は、葉の形態がウリに似ていることに由来する。中国名は、八角楓。



ノイバラ

バラ科バラ属の落葉性のつる性低木。日本のノバラの代表的な種。沖縄以外の日本各地の山野に多く自生する。ノバラ（野薔薇）ともいう。花期は5～6月。枝の端に白色または淡紅色の花を散房状につける。花には香りがある。秋に果実（正確には偽果）が赤く熟す。



ヤマアジサイ

アジサイ科アジサイ属の落葉低木。山中で沢によく見られることから、サワアジサイとも呼ばれる。花は、周囲にがくの大形の装飾花と中に多数の両性花が集まって咲く。



希少

ママコナ

ハマウツボ科ママコナ属の一年草。山地の林縁などの乾いた場所に生育する半寄生植物。花弁に2つ並んだ白い膨らみが米粒のように見えること、または、若い種子が米粒に似ていることが和名の由来の説となっている。



オトギリソウ

オトギリソウ科オトギリソウ属の多年生植物。茎の先に黄色の花をつける。葉に黒点がある。この草を原料にした秘薬の秘密を漏らした弟を兄が切り殺したという平安時代の伝説によるものである。



ウツボグサ

シソ科ウツボグサ属の多年生。花期は5～7月頃で、茎の先端に3～8cmの角ばった花穂をつけ、紫色の唇形花を密集して穂の下から上へと順に咲かせる。茎は四色、葉は対生。花が終わると、夏には花穂は暗褐色に変化し、一見枯れたように見えるところから、別名を夏枯草（かごそう）ともよばれる。



タケニグサ

ケシ科タケニグサ属の大形の多年草。日当たりのよい草原、空地などによく見られる雑草で伐採後の裸地によく生える。有毒。茎や葉に黄褐汁がある。葉の裏面は白い。



イワガラミ

アジサイ科イワガラミ属の落葉つる性木本。名前のとおり、幹や枝から気根を出して高木や岩崖に付着し、絡みながら這い登り、高さ10~15mくらいになる。花期は6月~7月で、小さなややクリーム色の両性花が集まる花序のまわりに、白色の装飾花が縁どる。装飾花は花弁状の萼片が1枚しかない。



ムラサキシキブ

シソ科ムラサキシキブ属の落葉低木である。日本各地の林などに自生し、また果実が紫色で美しいので観賞用に栽培される。

花は淡紫色の小花が散房花序をつくり、6月頃咲く。秋に果実が熟すと紫色になる。

名前の由来は平安時代の女性作家「紫式部」だが、この植物にこの名が付けられたのはもともと「ムラサキシキミ」と呼ばれていたためと思われる。「シキミ」とは重る実 = 実がたくさんなるという意味。



アカメガシワ

トウダイグサ科アカメガシワ属の落葉高木。新芽が鮮紅色であること、そして葉が柏のようになると大きくなる。柏が生息していない地域で、この木の葉を柏の葉の代用として柏餅を作ったことからアカメガシワと呼ばれるようになったとの説も。古名は楸(ひさぎ)。いわゆる「万葉植物」に数えられる。



(ウィキペディア)



ネムノキ

マメ科ネムノキ属の落葉高木。別名、ネム、ネブ。葉は2回偶数羽状複葉。花は頭状花序的に枝先に集まって夏に咲く。淡紅色のおしべが長く美しい。香りは桃のように甘い。果実は細長く扁平な豆果。和名のネム、ネブは、夜になると葉が閉じること(就眠運動)に由来する。



リョウブ

リョウブ属の落葉小高木である。若葉は山菜とされ、庭木としても植えられる。古名ハタツモリ。高さは3~7mになる。樹皮は表面が縦長な形に剥げ落ちて、その後茶褐色で滑らかになるので、「サルスベリ」と呼ぶ地方もある。花は夏に咲き、花弁は白く5裂する。枝先の長い総状花序に多数の花をつけよく目立つ。果実はさく果で3つに割れる。



クサギ

日当たりのよい原野などによく見られるシソ科クサギ属の落葉小高木。葉に悪臭があることからこの名がある。花は8月頃咲く。花弁は白、がくは、はじめ緑色、しだいに赤くなり甘い香りがある。昼間は大形のチョウが、日が暮れると大形の蛾がよく訪花し、受粉にあたる。果実は紺色の液果で秋に熟し、赤いがくが開いて残るためよく目立つ。



(ウィキペディア)



ヤブラン

キジカクシ科ヤブラン属の多年草。山野の林内、樹下に生える。草丈30~60cm、花は7~9月、株の葉の間から多数の花茎が立つ。淡紫色の小さな花が固まって咲き、8~12cmの穂状となる。



クマヤナギ

クロウメモドキ科クマヤナギ属のつる性落葉低木、冬は葉を落とし、黒々とした幹やつるがクマを連想するところからクマヤナギの名が付くが、ヤナギとは別の種の植物である。果実は甘みがあり、生食もできるが、果実酒の材料にすることが多い。つるは粘りがあり強く強靱なことから、雪靴のすべり止めのかんじきなどの材料に用いられた。



イタドリ

タデ科タデ属の多年生植物。別名は、スカンポ(酸模)。若い茎は柔らかく、春頃の紅紫色でタケノコ状の新芽は食用になり、根際から折り取って採取して皮をむき山菜とする。当地ではイタズイコと呼ぶ。



(ウィキペディア)



ヤブカラシ

ブドウ科ヤブガラシ属の多年草。つる植物で、日本ではよく見かけ、藪や荒地に普通に見られる。

和名は藪を覆って枯らしてしまうほどの生育の旺盛さを示している。別名ビンボウカズラ(貧乏葛)とも呼ばれ、庭の手入れどころではない貧乏な人の住処に生い茂るなどの意味に解釈されている。



希少

トモエソウ

オトギリソウ科オトギリソウ属の多年草。花期は7~9月で、径5cm、花弁5個の大きな黄色の花を茎や枝の先につける。花は巴形のゆがんだ形をしており、和名の由来となっている。



希少

ヤマゴボウ

ヤマゴボウ科ヤマゴボウ属の多年草。人家付近にはえる。根は肥大し、円柱形。茎は太く、直立し、高さ1m内外となり、大型で楕円形の葉を互生する。花序は直立し、果実は黒紫色。有毒植物。近縁のヨウシュヤマゴボウは北米原産で、花穂や果穂は下垂する。市街地にはこの方がふつうに見られる。なお、ヤマゴボウの漬物として販売されているものは、モリアザミの根(アザミ)。



白花もある

ネジバナ

ラン科ネジバナ属の小型の多年草。別名がモジズリ（縷摺）。湿っていて日当たりの良い、背の低い草地に良く生育する。花色は通常桃色で、小さな花を多数細長い花茎に密着させるようにつけるが、その花が花茎の周りに螺旋状に並んで咲く「ねじれた花序」が和名の由来である。



希少

オニスゲ

カヤツリグサ科スゲ属の多年草。大きくて先の尖った果胞を短い小穂に密生して着ける。和名は鬼スゲの意味で、大型の果胞に基づく。また別名をミクリスゲといい、これは果穂の形がちょうどミクリ類の果穂に似ていることによる。



キカラスウリ

ウリ科カラスウリ属の植物で、つる性の多年草。花は白く、6月9月にかけての日没後から開花し、翌日午前中から午後まで開花し続ける。果実は熟すと黄色くなる。雌雄異株である。皮層を除いた塊根は栝楼根（カロコン）という生薬（日本薬局方に記載）で、解熱、止渴、消腫などの作用がある。



ミズオトギリ

オトギリソウ科ミズオトギリ属の多年草。地下茎は帯紅色で、匍匐し、分枝してふえる。花期は8～9月。茎先および各葉腋に短い柄のある花序をつけ、少数の花をにつける。花は淡紅色で直径約1cmになり、午後には開き、夕方にしぼむ。湿地に群生する。



イチヤクソウ

ツツジ科イチヤクソウ属の常緑の多年草。林下に生える。花期は6～7月。葉の間から長さ15～20cmになる花茎を伸ばし、総状花序をつけ、3～10個の花がつく。和名「一葉草」の由来は、花期の全草を乾燥させたものが民間薬とされたためという。



ボタンヅル

キンポウゲ科センニンソウ属の落葉つる性半低木。夏に白色の花をつける。有毒植物。和名の「牡丹蔓」は、葉の様子がボタン（牡丹）に似、つる性であることからついた。



ヘクソカズラ

アカネ科ヘクソカズラ属の蔓(つる)性多年草。広く山野にはえる。葉や茎に悪臭があることから屁屎葛(ヘクソカズラ)の名がある。古名はクソカズラ(糞葛・屎葛)。干して果実を薬用とする。ただ、生の果実は悪臭があるが、乾燥したものは不思議と臭いが消えるため、乾燥したものを使うことが多い。



ノザサゲ

マメ科ノササゲ属の多年草。別名:キツネササゲ。日当たりのあまり良くない林縁部や林内に生える蔓性の多年草。花は8～9月、細身なマメ科らしい形状で、鮮やかな黄色。実は熟すと紫色に色づく。



(ウィキペディア)



ウバユリ

ユリ科ウバユリ属の多年草。山地の森林に多く自生する。ユリに似た花をつけるが、葉は大きくユリとは異なる。花期は7～8月であり、花が満開になる頃には葉が枯れてくることが多いため、歯(葉)のない「姥」にたとえて名づけられた。



オニドコロ

ヤマノイモ科ヤマノイモ属で、ツル性の多年草。葉は互生する。根茎は横に這い、ひげ根が多い。山芋や自然薯と同じ仲間。名前の由来は不明だが、漢字の由来ははっきりしている。根茎から生えている根が老人のヒゲのように見えることから、野山の老人で「野老(トコロ)」となり、「鬼野老」と漢字が当てられた。



(ウィキペディア)



オオイヌタデ

タデ科タデ属の一年草。別名アカマンマ道ばたや畑、荒地などにごく普通に生える高さ20～50cm。

茎は普通赤みを帯び、下部は地を這う。花序は長さ1～5cmで紅色の小さな花を多数つける。小さな赤色の花を赤飯に見立ててアカマンマと呼び、子どもがままごとに使った。



(ウィキペディア)



ニガクサ

シソ科ニガクサ属の多年草。木陰に生え、夏に淡紅色の花の穂をつける。茎は四角、葉は対生。花期は7～9月で、茎の先端に花序を集中させる。ちなみに噛んでも苦くはない。



若芽は食用に

ノカンゾウ

ユリ科ワスレグサ属の多年草。根茎は太くて、肥厚部がある。葉は根生し、2列に並び、線形で、7~8月、茎上部に二分する花穂をつけ、10個ほどの黄赤色の花を次々に開く。花はややユリに似た6弁花で、朝に花を開き、午後にはしぼむ。山菜として食用にもなる。



(ウィキペディア)

ツチアケビ

ラン科ツチアケビ属。森林内に生育するラン科植物である。腐生植物（菌従属栄養植物）で葉緑素をもたない。非常に草たけが高く、大きな真っ赤な果実がつくので、大変人目を引く植物である。日本固有種。別名ヤマシャクジョウ（山錫杖）。和名は果実がアケビ形で地面から生えるアケビの意であると考えられる。



希少

(ウィキペディア)



若芽、花は食用に
根は生薬

ヤブカンゾウ

ユリ科レグサ属の多年草。花期は6~7月。花は重弁で夏の盛りに咲く明るいオレンジ色の花は、どこでも見掛ける。春の若芽は山菜として食用にもなる。紡錘状に連なった根は、生薬「萱草根（かんぞうこん）」で、漢方では利尿、涼血、消炎、止血薬として、膀胱炎や不眠症に用いられる。



エゾリンドウ

リンドウ科リンドウ属の多年草である。日本原産で、北海道から本州近畿以北にかけて分布し、山地の湿地帯に生える。花期は9~10月。日が差すと花が開き、リンドウよりも淡い青紫色の花を咲かせる。



希少

(ウィキペディア)



イボクサ

ツククサ科イボクサ属の一年生植物。湿地に生える雑草で、水田では畦によく出現する。

葉の汁をつけると疣(イボ)が取れるといわれて名付けられた。



ヒガンバナ

ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草。曼珠沙華(マンジュシャゲ)とも呼ばれる。秋の彼岸頃に赤い花をつける。地下に鱗茎がある。アルカイド毒がある。稲作の伝来時に土と共に鱗茎が混入してきて広まったと言われる。鱗茎は適切に用いれば薬になり、また水にさらしてアルカロイド毒を除去すれば救荒食にもなる。



カワミドリ

シソ科カワミドリ属の多年草。植物体全体に特有の強い香りがある。秋に紫色の花が穂状となって密につく。茎は四色、葉は対生。山地の草地に生育する。



キツネノカミソリ

ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年生。草本球根植物。8～9月に黄赤色の花をつける。明るい林床や林縁などに自生する。早春のまだ他の草が生えていないうちに狭長の葉を出して夏頃には一旦葉を落とす。毒成分はリコリンなど。



希少

(ウィキペディア)



ツリフネソウ

ツリフネソウ科ツリフネソウ属の一年草。花期は夏から秋（山地では8月頃から、低地では9～10月）。その花が帆掛け船を釣り下げたような形をしていることや花器の釣舟に似ていることが名前の由来と考えられている。果実ははじけて種子が飛び散る。谷や川辺の湿った所に群生する。



ベニバナボロギク

キク科ベニバナボロギク属の一年草。ひよろりとした柔らかな草で筒状の先端が赤くなる花をつける。日本では第二次大戦後の帰化植物。山の荒地や刈跡に生える。



ユウガギク

キク科ヨメナ属の多年草。花は淡紫色、中心は黄色。日当たりのよい草地や道端などに生える多年草。地下茎をのばしてふえるので、群生することが多い。一般には野菊と呼ばれる種類のひとつ。葉にかすかに柚の香りがすることから「柚香菊」ともいわれるが、ほとんど香りはなく由来は不明。



イヌガンソク

シダ植物。オシダ科クサソテツ属の大形多年草。夏緑で冬は枯れる。葉とは別に胞子をつくる。胞子葉がある。胞子葉がガンの足に似ている。和名の由来はクサソテツのことを雁足（がんそく）と言ったことから。これは、この種の根本で葉柄の基部が集まっている様子を雁の足になぞらえたことによる。



(ウィキペディア)



ダイヤモンドシソウ

ユキノシタ科ユキノシタ属の多年草。草丈 20～30 センチ。花は 9～10 月、白。花弁のようすが大の字形に見える。水湿の壁地に生える。



希少

(ウィキペディア)



クサソテツ

シダ植物。オシダ科クサソテツ属の多年草。夏緑で冬は枯れる。胞子をつくる。胞子葉をつくる。河川敷や山麓の湿地に自生する。古くから馴染み深い山菜のひとつであり、コゴミと呼ぶ。春に渦巻状に丸まった幼葉を採取する。

5月上旬から6月中旬、おひたし、サラダ、ゴマ和えなどの和え物、天ぷらなどにして食べる。



コウヤワラビ

シダ植物。オシダ科コウヤワラビ属の多年草。夏緑で冬は枯れる。湿地に生える。独特の羽片の幅が広い栄養葉と球形の胞子嚢群を含む小羽片が数珠のように並ぶ胞子葉をつける。



ヤマヤブソテツ

シダ植物。オシダ科ヤブソテツ属の多年草。常緑で側羽片は 5～10 対が普通。葉は光沢のない厚い紙質で、淡緑色。羽片の基部の耳垂がヤブソテツよりはっきりし、羽片の幅が 3 cm 以上と広いのが特徴。

希少



希少

ヤマソテツ

キジノオシダ科キジノオシダ属の多年草。夏緑性。斜上する根茎から、葉を放射状に束生する。葉柄基部は三角形。葉には栄養葉と孢子葉の二型がある。栄養葉は単羽状で櫛(くし)の歯のように並び、辺縁にぎざぎざをもつ。ブナ林の林下に多い。



イワガネゼンマイ

ホウライシダ科イワガネゼンマイ属の多年草。常緑、大型で、1 m以上になることもある。根茎は匍匐する。葉脈は平行で、葉のへりまでとどく。



(ウィキペディア)



クジャクシダ

シダ植物。ホウライシダ科ホウライシダ属の多年草。夏緑で、冬は枯れる。和名「孔雀羊歯」は葉の枝分かれに特徴があって、羽状複葉になった枝(羽片)を扇のように広げた姿がクジャクの尾羽を思わせるのが和名の由来である。



希少

キヨタキシダ

シダ植物。オシダ科メシダ属の多年草。夏緑で冬に枯れる。葉柄と中軸に黒褐色の鱗片がつき、黒く見える。山の林下に生える。



トラノオシダ

シダ植物。チャセンシダ科チャセンシダ属の多年草。常緑でごく身近にはえる小型で柔らかいシダで、細かく分かれた細長い葉が特徴である。山間の岩地やガレ場のようなところから、人里の石垣まで幅広く生育している。



ベニシダ

シダ植物。オシダ科オシダ属の多年草。常緑。草原や明るい林内などによく見られる。若葉は赤いためにこの名があり、また若い胞子嚢も赤い。



ミゾシダ

シダ植物。オシダ科ミゾシダ属の多年草。夏緑で冬に枯れる。低地のやや湿気た所に生える。根茎は長く這う。葉柄はやや褐色で毛が多くつき、基部に三角状披針形で淡褐色～褐色の鱗片がつく。



シシガシラ

シダ植物。シシガシラ科シシガシラ属の多年草。常緑。木陰のやや湿った斜面にはえる。林下にごく普通に見られる。はっきりした形の葉を密集してつけるので、よく目立つ。日本固有の種である。



ジュウモンジシダ

シダ植物。オシダ科イノデ属の多年草。山間部で見られるやや小型のシダ植物である。葉の形が十字型に見えるのでこの名がある。山間部では普通なシダである。夏緑性だが、暖地では冬も葉がきれいに残る。



ヒメシダ

シダ植物。ヒメシダ科ヒメシダ属の多年草。あぜや、よく日の当たる湿った草原などに生える夏緑性のシダ植物。根茎は長く横走し、先端に黄褐色で膜質の鱗片をつけるが、古い部分は裸出している。葉は直立し、胞子嚢をつける葉が高くなる。

【発行】

上町公民館特色ある事業実行委員会

【編集】

竹内 剛 中 正道 中 玲子

【監修】

浦 信一

【参考文献等】

「能登の植物」、「石川県植物誌」、「石川の自然植物」、「ウィキペディア」

表紙写真提供・田中和人